

研修前と後の自分自身の変化

- 訪問現場を見たり、ロールプレイを行うことで家族や本人に対する関わり方や支援の展開について、イメージを持つことができるようになった。
- 本人への関係性重視→アセスメント・インテーク及び家族との関係性とリアルな情報を届ける視点も必要
- チームアプローチへの意識
- 支援機関の役割分担・連携・仕組みの必要性
- 合宿方支援に対するイメージの変化
- 地域の実態を知る(どんなニーズがあるのか?)
- 市民の理解を進めていく

研修生⑬

特定非営利活動法人 青少年自立援助センター 北斗寮

アウトリーチ(訪問支援)研修

認定特定非営利活動法人コムサロン21

ひめじ若者サポートステーション

コンテンツ

1. 研修先
2. 研修内容
3. 振返り

1. 研修先

団体名

がまごおり若者サポートステーション
(特定非営利活動法人青少年自立支援センター北斗寮)

場所

愛知県蒲郡市 (人口約8万2千人)

職員

常勤7名 非常勤9名 外部専門家2名



2. 研修内容（印象的な研修カリキュラム4項目）

- ①事例研修、ロールプレイング
- ②地域との協働事業
～ミカワ・コットン・プロジェクトin蒲郡～
- ③中間就労（ハウスクリーニング、資源回収）
- ④B-1グランプリin豊川（11月9日、10日）

①事例研修、ロールプレイング

- ・ インテーク面接の聞き取りポイント（主訴、発生状況、現在までの経過など）
- ・ 情報提供の内容（地域サポステ、ジョブカフェ、NPO等支援機関など）
- ・ 訪問支援の基礎知識、方法論など
- ・ ロールプレイング

②地域との協働事業

～ミカワ・コットン・プロジェクトin蒲郡～

江戸時代以降、三河木綿として地域ブランドだったが衰退。

現在、地域ブランドを再生させようと地元繊維組合の農家とがまごおり若者サポートステーションが協働で

綿の栽培



織り加工



製品化

しようという「ミカワ・コットン・プロジェクトin蒲郡」が取組まれている。

未就労の若者が社会参加の一環として農家の方と一緒に汗を流していた。

「この子らがこれ（綿栽培）で元気になってくれたら良いと思っています」と綿組合の小田氏。

地域の理解を感じられた。



③中間就労

ハウスクリーニング

地元不動産屋から請負っており、原則として、ある程度の判断力や責任能力が芽生えた者のみを参加条件とされていた。失敗や上手くいかないことはその場でスタッフと対策を考え、社会にでる為の知識や考え方を身につける就労訓練の場であった。

資源回収

旅館、コンビニ、商店など約15ヶ所から新聞、雑誌、ダンボールなどを回収し市のクリーンセンターへ持ち込む作業。

回収先で声をかけられたり差し入れを頂くなど地域住民の理解と協力があり、地域に取組が浸透しているが事が印象的だった。

④B-1 グランプリ in 豊川

がまごおり若者サポートステーション



×



ひめじ若者サポートステーション

3. 振返り

- ひきこもり問題に地域は関係ない
- 各サポステごとに支援方針に特色があり、知識の幅を広げるために他団体へ研修に行くことは効果的である
- 情報格差がある
- アウトリーチは経験の積み重ねが大切であり、事前準備やシミュレーションを行うなど慎重に訪問をくり返し対応する必要がある
- 当事者だけでなく親、家族を含めた支援が必要な場合が多い
- 適正な支援機関との連携が必要
- 当事者へのアプローチは様々な方法がある
- 全国から支援者が研修生として集まり知り合えた関係を継続することは今後の課題である